
Arisa

明里 ルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A r i s a

【Nコード】

N 2 5 2 3 0

【作者名】

明里 ルカ

【あらすじ】

13才の秋、亜梨紗が死んだ。私たちの目の前で。その後の平穏すぎる日々と、1ピース足りない学校生活。空白を捜しているときに、私たちは亜梨紗の痕跡を捜し始める。いつしか、亜梨紗からのメッセージが届くようになる。亜梨紗はずっとそこにいた。ただ、ずっとそこにいた。

死

それは突然だった。

人の死とは、こんなに簡単に訪れるものなのだろうか。

いや、簡単ではない、当たり前前に決まっていたことが、当たり前前に訪れ、当たり前前に過ぎ去っていっただけなのだろう。人間は、それを突然と呼び、驚き、震え、そして忘れる。過去のことなど、もうどうでも良いのだ。そしてまた、新しい突然に驚き、震え、そして忘れる。

亜梨紗のときとて、例外ではなかった。消えかけの命を目の当たりにし、私は怯えた。

「亜梨紗！」

無力なのは分かっている。分かっているても、ただ指をくわえて友人の死を見ていられようか。手を握り、声を掛ける。だんだん意識が薄れてゆく亜梨紗。

「未来、救急車まだ来ないの!？」

「来ない……………」

「ちよつと、未来、あんたが倒れないですよ？」

未来の白い顔がさらに蒼白になっている。

「亜梨紗あ、死んじゃだめだよあ、亜梨紗あ」

弱々しくも、大きい未来の声に気づいたのか、亜梨紗がうつすら目を開けた。そのとき、サイレンの音が聞こえた。遅い。普通なら早いのもかもしれないが、この状況ではどう見ても遅かった。

「…バイバイ」

「まって、バイバイじゃない、バイバイじゃないよ、亜梨紗、救急車来たから、乗って、病院行って、お家帰ろう!？」

救急車が横に止まった。状況を隊員の人から聞かれる。

名前、年齢、住所、どうして事故にあったのか。

答えたくなかった、亜梨紗の側にいたかった。でも私は、涙声で隊員の質問に答えていった。あつという間に亜梨紗は車の中へ運ばれ、未来も吸い込まれるように乗っていった。ぼおっとしているあいだに、どうやら私は置いてきぼりにされたようだ。こんな事をしている場合ではない。いそいで、亜梨紗の家の電話を掛ける。

「池森ですが」

「谷野です、谷野歩菜ですっ！」

「あら、あゆちゃんどうしたの？」

いつもの優しいお婆さんの声。

「お婆さん!?!」

「そうだけど。どうしたの、そんなにあせって」

「亜梨紗が…亜梨紗が、バイクにはねられたのっ」

「え……………」

「嘘じゃないの、本当なの、今、救急車に乗って……………」

お婆さんはあわてることもなく、冷静な声で言った。

「あゆちゃん、今どこにいるの？」

「あつ、あの、駅前のファミマ」

「多分今、電話はいると思うから私はここで家族に連絡する。あゆちゃんは家に帰りなさい」

「でも」

「帰りなさいっ」

「…はい」

家まで、3分。それまでの間、私はただ、ずっと、泣いていた。下を向き、嗚咽をこらえ、ただ、泣いていた。

中学1年生の秋の日。

友を一人失った、秋の日。

出逢ったあの日から、

「はい、自由時間です。15分後には自分の席に戻ってください」

初めての中学校登校日。結構田舎のこの町は小学校が3つしかなく、しかもすべてクラスは1つ。大体みんな幼稚園は同じで、小学校で別れ、そして、中学校で再会する。だけど私は小学校の時に札幌から引っ越してきたので、小学校時代の友達しか馴染みがなかった。

「ほら、そんな硬くならなくていいじゃん」

親友の未来が話しかけて、手を握ってくれた。こっさり指を指したりしながら、他の女子は男子の品定めを始めている。男子は意識していないような振りしながら、ちらちら女子を見ている。みんなもとは友達だから、緊張なんてほとんどしていないのだ。

1クラスしか経験していない1年生は、中学生になって初めて2クラスを体験することになる。私は5クラスもある学校から転入してきたから、逆にそれが不思議だった。というより、2クラスしかないことに違和感を感じたりもしていた。

「あ、歩菜だ」

「え、誰？」

「んとね、私の幼稚園の時の仲良かった友達。あーゆなあーっ」
歩菜、と呼ばれた子が振り向いた。2つ結びにしているけど、よく見るとサイドに編み込みがしてある。器用な子だな、と思った。ちなみに私はものすごく不器用だ。今日も肩胛骨くらいまである髪を高いところで縛って、適当にまとめておだんごにしているだけ。

「マジ久だあ、歩菜」

「だねえ、未来」

「あのね、この子、あたしの今の親友」

「どーも、赤田出身の谷野歩菜です」

「あ、私は塔本の鹿西亜梨紗です」
ちなみに赤田、塔本というのは小学校の名前。なぜかこの町は、赤小・塔小などと縮めて呼ばず、上の名前で小学校の名前を呼ぶ。不思議だ。もう一つの中野川小も、中野川と呼ぶ。

「タメでよくない？」

「ん、じゃ、タメで」

「うっうん、よろしく！」

上がり気味の私を見て、歩菜はちよつと笑った。

「え？ あ、ごめん、あの、私緊張しいでさあ……」

「違うの」

「え」

「なんかさ、画数多そうな名前だから、書くの大変だろうなあっておもって」

「ああ……」

鹿西亜梨紗。何度この名前を恨んだことか。小1でパスポートを作るとき、泣きながら漢字の名前を練習したのを今でも鮮明に覚えている。小学1年生、7才の子供にとっては、嫌がらせといってもいいほど、私の名前は書きにくかった。両親も幾度か私に謝っていたし。

「さすがは歩菜、凄いとこからはいるね」

「いや、ただ思ったただけだよ」

歩菜が恥ずかしそうに笑う。

「てゆーか、呼び捨ても良いよね？」

歩菜が聞いた。私の心の中ではもう、勝手に呼び捨てにしているけど、私は一応答えた。

「歩菜ちゃんがいいのなら、全然私も良いよ」

「じゃあ、亜梨紗」

「何？」

3人が手を重ねた。

「これからよろしく。」

「時間になったので席についてください。簡単に校則の説明をします」

ずっと仲が良かった私たち、

部活は迷った結果、陸上部に入部した。1年生が入ってやっと1人という小さな部活だけど、それなり足の速い人がいて、毎年全道大会への出場は欠かさない。私も特に足に自信があるわけではなけれど、頑張つて走り込めばいいかな、と思つて陸上部にはいることを決めた。

未来はバドミントン部、歩菜はテニス部、3人とも部活は離れてしまつたけど、休み時間はほぼずっと一緒にいる。

未来は今、好きな人がいるらしい。

「告つたほうがいいのかなあ」

「いや、もうちょっとアピつてからの方が絶対良いつて！」

歩菜が一生懸命アドバイスしている。同じクラスの光樹という男子が好きだといつているけど、私は恋愛のことはよく分からないので、黙つて聞いているだけだ。

「亜梨紗はいないの？」

「え？」

「だあかあ、好きな人」

未来がずいっと寄つてきた。

「準希さんは？」

準希さんは、陸上部のキャプテン。走る姿はかっこいいけど、残念ながら好みではない。

「ううん……別に、好きな人はいないかな」

「なんだ」

「つまんないの」

正直言つて、気になる人はいた。二人に言つて大騒ぎするから、絶対言わないけど。

「やっぱさあ、多田さんカップルが理想だよねえ」

歩菜が溜息をつきながら言った。

「え、でも、あんまりメールしないって聞いたよ？」

多田勇氣さんは陸上部で、よく話しもする。凄く優しく、めっちゃめっちゃかっこいいわけではないけど、可愛い彼女もいて……。気になるというのは、多田さんのことだ。

「でもさあ、たまに買い物してるのとか見ると、めっちゃめっちゃ仲良さそうじゃん？」

「ん、まあ」

未来が言った。

「でも、うちは、毎日メールして、週1で電話して、学校でも毎日ハナサなきや嫌かな」

「それはワガママじゃない？」

「そうかなあ……」

次は音楽だ。私たちはいそいそと教室の移動を始めた。

やがて彼女は仲間も増えて、

「亜梨紗あ」

常にフレンドリーでフリーダムな陸上部が性格に合っていたのか、私はすぐにみんなと仲良くなる事が出来た。

「何、」

「今日のメニュー教えて」

「いや……準希さんに聞いて」

いつも何かと話しかけてくるのは宮城涼太郎。クラスは違うけど同じ一年生だ。種目は1500?と1000?を指すという無謀なチャレンジをしているが、さすがにキツイのであきらめたらしい。今は、長距離の練習に専念している。

「準さん」

「はいはい、メニューはねえ、筋トレ、コアトレ、30分ジョグ、500メートルダッシュ3本」

「ええー、面倒くさい」

「俺だつて面倒くさいよ」

涼太郎の頭をワシワシと撫でてそんなことを言っている準希さんだけど、実際は全道大会に1年からずつと出場している努力家の人だ。

「亜梨紗だつ 亜梨紗だつ」

「あ、亜美さん」

私を見つけて突進してきたのは村田亜美さん。すつごくキレイな人で、準希さん曰く黙っていればモテモテ、しかしテンションの起伏が激く気分屋で、陸上部の女王として君臨している。腰を痛めていて活動はしていないが、いつも顔を出してくれる。で、なぜか私を見つけると突進してくる。

「あのねー、亜美ねー、今日ねー、テストねー、69点だったー」

「何ですかその微妙な数字」

亜美さんがにこにこ笑う。話している内容は別として、やっぱりすごくキレイな人だ。

「てか始めましょーよー」

多田さんが口をとがらせて言う。相変わらず姿勢が悪い。腹筋も私の方がある。でも、毎年全道大会に出場できるほどの実力を持っている。なぜ？

「じゃあー、アップ行くよお」

「あーい」

緩い。いつもの事ながら緩い。先生はアップが終わらないと来ないため、こんな調子で前半が終わる。

「だあー、もう走りたくねえー」

本当に陸上部か、と耳を疑うような発言をしているのは蒲田^{かまた}光彦さん。2年生で、多田さんには劣るけどいつも大会では入賞しているらしい。

「じゃ 即刻部活やめろ」

「だって俺やめたら陸上部ますます人数少なくなるじゃん？」

「まあ……そうだけど」

そう、1年生が入る前まではこの陸上部、6人しかいなかったのだ。引退した前の三年生を含めても8人。入学式の部活紹介の紙には、「絶滅寸前の陸上部に愛の手を」とふざけではなくマジメに書いてあったくらいなのだ。で、一年生は6人入り、喜ぶかなあと思ったら準希さんの一言。

「え、まよめの想像以上に大変だから、こんなに人数いらない」

結局2人は塾とか習い事でたまにしか来ないし、亜美さんも走れないので、実際走っているのは9人。

どこまでもフリーダムな陸上部なのだ。

告別式

亜梨紗の告別式が終わった。

突然バイクではねられ、血を流しながら、苦しみながら死んでいった亜梨紗。もしかしたら死ななかったかもしれない、と医者は言った。ぶつかった場所とタイミングが悪かった、と言った。そんな言葉なんて必要なかった。後から何と言いつくとも、死んだという事実は変わらないのだから。

棺桶の中で、みんなにもらった花に囲まれながら、亜梨紗は泣いているように見えた。死んだ人の顔が笑って見えるという話を聞くが、亜梨紗は全然そんなことはなく、悲しい顔をしていた。

「涼太郎？ 涼太郎？」

隣にいた涼太郎が、不意に顔を上げなくなった。その理由に気づき、私は声を掛けるのをやめた。泣いているのだ。涼太郎が、泣いている。

「何で死ぬんだよつ、死ななくても良いだろ……っ」

「一緒に全道行くって約束したろ？ いつもみたいに俺のことたたけよ！ 馬鹿にしてみるよ！ ずっと友達だっけっていったらだろ！！」

私は泣かなかった。というか、泣けなかつた。未来も同じだ。涙一つこぼれてこない。悲しみという感情さえも感じることはない。それが逆に怖いくらいだった。私は亜梨紗が大切ではなかつたのか。大切な友達ではなかつたのか？ 何度問いかけても、心から返事は返ってこなかつた。

事故の現場を見て、精神的なケアをうけた方が良く、カウンセラーの人も話したが、カウンセラーの人も首をかしげるほど、私は淡々と事故の状況を話すことが出来た。

告別式には、涼太郎をはじめとする部活の友達、先輩がみんな来ていた。

私は、ある人の姿を見つけた。

「多田さん」

「なんでだろうな」

「え？」

「長い間ずっといたわけでもないのに、なんか……」

「悲しいんですか？」

「いや、なんか、心に穴が開いてしまったみたいでさ」

多田さんが苦笑いした。

未来は、亜美さんと話していた。亜美さんは、号泣していて、まるでどちらの親友が死んだのか分からないくらいだった。

「亜美……もつと、亜梨紗を大切にしていれば良かった」

「亜美さんは十分大切にしていたと思いますよ」

「違う！」

そういつたきり、亜美さんがしゃがみ込んで動かなくなってしまうので、未来が困っていた。その場に準希さんが来て亜美さんに声を掛ける。蒲田さんも近くに来た。

時間がたち、会場の人まばらになっていた。クラスメイトさえも帰り始めているというのに、陸上部の人たちは帰ろうとしなかった。

なぜこの人たちはこんなにも悲しめるのだろう。こういつては怒られるかもしれないけど、私は陸上部の人たちのことが、羨ましくなった。

ふつと力が抜けた。その場にぺたりと座り込んでしまう。次の瞬間、私は大粒の涙を流していた。まるで小さな子供のように。未来がかけてくる。でも、未来も泣いてしまっていた。安心した。

私は悲しいのだ。やっぱり、亜梨紗が死んでしまつて、悲しいのだ。死んでほしくなかったのだ。ずっと生きていて欲しかった。ずっと、一緒に生きていたかつた。

大きな声でそんなことを叫びながら、私は泣き続けた。人数の割に大きすぎるホールに、私と未来の叫び声は響いた。

私たちは両親に連れられて、帰っていった。

そして全てが輝き始める、

ある初夏の晴れの日。北海道で初夏は、普通に寒い。みんなジャージの上にウィンドブレーカーを羽織っている。

「今日は体育大会が近くなってきたので、全部の競技を試しにやってみたいと思います。」

そんな話は聞いていない。ざわめきが広がった。この学校の体育大会は6月初旬。近くなつたと言っても、まだ一ヶ月以上ある。『一年生が優勝するのは、絶対不可能』と言われているのでみんなあまり興味がなかった。

「競技はー、ジャベリックスロー、女子800?男子1500?、幅跳び高跳び、混合リレーと男子・女子リレー、芋虫対決、部活対抗二人三脚です。今日やるのはー、800?と1500?だから、班体操始めてー」

がやがやと集まって、けだるいかけ声をあげながら体操をする。この寒い中で1500?も走らせるのか、と男子が愚痴っていた。

「超めんどくさい」

「亜梨紗は良いよねー、陸上部だし」

歩菜は溜息をつき、未来はよく分からない文句を私にぶつけた。

「いや、陸上部だから800がめっちゃめっちゃ早いつてワケじゃないから」

「でもちよつとは違うでしょ」

「でもうち短距離だし」

「え、でも未来は絶対亜梨紗が一位だと思っ!」

未来の予想に、歩菜が頷いた。

「てゆーかさ、芋虫対決って何」

未来が笑いながら言った。あまりにも先生が普通に言ったので聞き逃していたが、確かにそんな説明もしていた菜と思いつく。歩菜がお腹を抱えて爆笑した。

「誰が一番力強く美しい芋虫を育てられるでしょう！とか」

「アホでしょ」

未来が冷静にツッコミを入れる。

「じゃあ女子適当に並んでー」

「えー女子からですかあー」

歩菜が大声で不平を言う。先生は苦笑いしながらたしなめた。

「じゃーいくよ、よいドン！」

小学生のかけっこじゃないんだから、と思いつつも走り始めた。リズムに乗ってからだ揺れ、冷たい風が吹き抜ける。

風は冷たいが、太陽は温かい。そのうち暑くなって、上に着ていたジャージを脱ぎ捨ててしまった。気づくとトップで走っていた。振り向く気はしないが、後ろには人の気配を感じない。具合が悪くなって運ばれている人が見えた。自分に疲れはない。やっぱり、毎日走っているからだだろうか。

ゴールした瞬間、どっと疲労感が押し寄せてきた。フィールドに倒れ込む。芝がくすぐったかった。先生がタイムを発表してくれる。

「亜梨紗、3分23秒！」

このタイムが早いかどうかは分からなかった。けど、クラスで一番だったという理由で、2番だった未来と一緒に私は体育大会で800?に出場することになった。

裏に渦巻く暗い蔭、

「だよねえ、那帆なほもそう思うー！」

休み時間、耳障りな甲高い声が聞こえた。がやがやとうるさい教室に、ほんの一瞬、冷たい沈黙が訪れ、また話が再開された。歩菜がちよつと怒り気味に囁く。

「まただよ、今木。話に無理矢理入ろうとしてるのみえみえじゃん。うざいんだけど」

入学して1ヶ月半もたてば、もとは知らないクラスメイトの人格も分かってくるものである。そしてあちこちで嘘か誠かもよく分からない噂が囁かれるようになる。そのなかでも、今木那帆は目立っていた。小学校の時は喧嘩で暴力沙汰にまでなった、無視するのは日常茶飯事、いじめが趣味、ちなみに自慢が大好き。なのに、なにに中学入学と同時にぶりつこになった、モテたいから、むかつく、とよく分からない悪口を私も良く聞いていた。特に歩菜の那帆嫌いは酷かった。両学校の頃からいじめられていたらしい。

「でも……。私は何も悪いコトされてないから……」

「亜梨紗はいつもそればかり！そのうち本性現すよ、賭けても良いつ」

「未来もそうおもう。まあ、キャラチエンしようとする誤解されやすいからね、しょうがないよ、不自然なもの」

未来も私と同じ『特に興味が無い派』だ。だけど歩菜は『徹底的に嫌う派』なので、最近そのことについて対立することが多い。

「まあ、そのことについての話はやめよう？」

まだ何か言いたそうな歩菜を、未来が諭した。

「ピンポンパーンパーン」

「放送だ」

「うるさいっ黙れっっ」

歩菜が騒いでいる男子に怒鳴った。

「図書委員は小会議室に至急集合してください。繰り返します、図書委員は……」

「うわ、行かなきゃ」

歩菜と未来は図書委員だ。二人とも走って行ってしまった。ぼかんとしていると、誰かに肩を叩かれた。

「ねえ……亜梨紗ちゃん？」

「あ、那帆ちゃん」

どきつとした。話しかけてきたのはさっきの話の張本人、今木那帆だったからだ。あまり話したことがないのでちゃん付けなのは仕方ない。

「あの、ちよつと話があるんだけど
強引に手を引つ張られる。」

「え？」

「未来たちと仲いいでしょ」

「う、ん」

「そつちやめてさ、うちと組まない？」

「は？」

耳を疑った。組む？意味が分からない。

「ふふつ、意味不明って顔してる」

「……………」

「あたしさー」

わざとらしい溜息をついて、那帆ちゃんは腕を組んだ。

「ううん、やっぱり何でもない。とにかくっ」

どこからどう見てもぶりっこな動作をして、上目遣いで私のこと見てくる。

「亜梨紗ちゃんと友達になりたいの」

「はあ」

「どつどつ？」
「取引？」
「そつだ、じゃあ取引しよつか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2523o/>

Arisa

2010年11月14日02時29分発行